

論文要旨

他なるものへと応答する〈倫理〉的主体性の諸相 ——レヴィナス思想における「死」と「教え」の教育人間学的意義——

福若 真人

本論文の目的

本研究の目的は、他者の死と喪失を経験した者、あるいはそもそも自らの生を負うことに困難を抱える者に対して、どのように関わることができるのかという問いに対して、レヴィナス (Emmanuel Lévinas 1906-1995) の思想に通底する〈倫理〉的な主体のありようについて明らかにすることで、問いに応えるための視座を得ることである。とりわけ、「死」や「教え」(enseignement) をめぐる議論に着目し、他なるものに応答するなかで立ち現れる主体のありようを、レヴィナスがどのように語り直そうとしていたのかを探り、そこに見られる特徴を明らかにする。

レヴィナスの哲学的なテキストやユダヤ教論で語られる「主体性」(subjectivité) には、命題や規範的なものとして体系化されてきた「倫理」とは異なるような〈倫理〉的な特徴が見られる。本研究では、そうした特徴を有する主体のありようのことを、「〈倫理〉的主体性」と呼ぶ。他なるものとしての「死」に応答するとき、あるいはレヴィナスが「教え」と呼ぶ関わりにおいて「死」を取り扱うとき、〈倫理〉的主体性をめぐる議論がどのような示唆を与えるのかを検討する。

本論文の構成と概要

以上のような目的について検討するために、本論文は、六つの章と一つの補論を含む二部構成で論を進めていく。

序章では、本研究をめぐる問題の所在や、レヴィナスの思想研究および「死」を取り扱う教育の教育人間学的研究を踏まえた本研究の位置づけについて確認する。そのうえで第I部では、「死」をめぐる議論において、「死」と主体性がどのように関わっているのか、また、「死」に関する他者への応答に主体性がどのように位置づけられているのかといった点について確認する。

第1章では、レヴィナスが用いる主体性を「主体性」と〈主体性〉に二分し、それぞれの特徴と「死」との関係を確認する。それにより、レヴィナスが論じる主体性のうちに、固有性を剥奪し、存在一般として主体を繫縛する〈ある〉(il y a) への抵抗として自らを規定する「主体性」と、他なるものへの応答関係によって規定される〈主体性〉という二つの様相を見て取ることができる。そして、「主体性」に着目することによって、「主体の死」は、〈あ

る)への融即という限界に直面し、他なるものとの関係においてその克服をめざすものと捉えることができる。その際、主体には「他者の死」への応答が求められ、その過程に「主体性」から〈主体性〉へと変容する倫理的次元への移行が見られることが明らかとなる。

第2章では、「死者-生者」関係のなかで主体の〈倫理〉的な次元への移行が、どのように論じられていたかを確認する。晩年の議論に見られた「死者」と「生者」の関係は、「生者」のために「死者」を国家や家族のもとに領有したり、「語られたこと」としての「思い出」のうちに規定したりするものではなく、「死者」がもたらす「表象し得ないもの」との逆説的な関わりを「生者」に要請するものとして捉えることができる。そして、「死者」の思考に耳を傾け、「沈黙」を埋めることなく、「徴しとしての合図」を送るという生者の〈倫理〉的な関わりが、「語ること」という「語り」の営みをめぐる論を通じて導き出される。

第3章では、他なるものに応答する主体が「自らの死」ないし「無」と直面する過程に現れる〈倫理〉的な次元への移行を、「多産性」(fécondité)や「作品」(œuvre)といった概念を通じてどのように描き出せるのかを検討する。「多産性/繁殖性」には、「贈与する権能の贈与」というはたらきが、他なるものへの忘恩を要請する〈作品〉は、自己に回帰しない「根底的に考えられた」というはたらきが、存在としての「無」とは別の、主体の自己無化へと向かうはたらきとして捉えることができる。そうした自己無化へと向かうはたらきを、「存在するとは別の仕方」という主体の超越的なはたらきとして見て取ることができる。

このように第I部では、レヴィナスの思想における「死」と主体性との関係から立ち現れる〈倫理〉的主体性の様相を素描した。続く第II部では、レヴィナスの思想における「教え」と主体性との関係から立ち現れる〈倫理〉的主体性の様相を描き出すことを試みる。

第4章では、「教え」に現れる「師」と学び手の関係に着目し、〈倫理〉的な応答を触発する師の存在や、師と学び手との関係に立ち現れる〈思考〉のはたらきについて概観する。学び手のなかで、外傷により主体の思考を停止させる(無意味にする)状態から、意味をもった〈思考〉へと反転する過程において、現前する師との関係や、師の発話を「聞き」「問いを立てる」という「ことば」を伴う営みが必要となる点を見て取ることができる。このとき師は、学び手に「発話」を提供し、「問いを立てる」ことを触発するという役割を果たすこととなる。こうした師の役割が、「死」を取り扱う教育における他なるものへの〈倫理〉的な応答においても求められる点が示唆される。

第5章では、「師」と学び手との間で生じる「教え」という営みにどのような特徴が見られるのか、そしてその特徴を可能にする条件として、学び手にどのような主体のありようが求められるのかを確認する。とりわけ、「聞くこと」(entendre)という営みに着目しながら、「教え」と主体性がどのように連関するのかを確認する。それにより、非暴力的な「教え」がいかにして可能となるのかが明らかとなる。「教え」において学び手が「暴力的ではないしかたで動かされる」ことは、師によってもたらされる「注意」の喚起と、学び手による「聞くこと」、「問いを立てること」という応答の関係によって可能となる。また、「聞くこと」

には、主体に利害や関心が含みこまれない「他動性」のはたらきを見て取ることができる。

「聞くこと」という行為には、師の現前に身を置くこと、「自由な選択という特権に頼ることなく暴力の外に身を置くこと」（聞いて理解することに先立つ行い）が前提となる。非暴力的な「教え」は、師と学び手それぞれの「認識や存在に先立って出来る主体」のありよう、すなわち〈倫理〉的な主体性の問い直しを要請していることが明らかとなる。

第6章では、「教え」に見られる「師」と学び手のような二者関係の枠を超えた、三者以上の関係における主体のありようについて見ていく。そして、教え手と学び手の関係に「死者」がどのように位置づくのかを、「第三者」(le tiers) に関する議論を参照しながら検討する。二者関係のなかに非現前というかたちで現前する「第三者」は、主体に対して「無限」の責任を駆動させる「彼性」(illéité) のはたらきを有している。これに対し、二者以上の関係において第三の人間として介入する「第三者」は、無限の責任を中断させるとともに「比較し得ないものの比較」や「正義をもって私は何をしなければならないのか」といった「意識」に基づく応答を主体に要請するはたらきを有している。それぞれのはたらきを有する「第三者」として現前する「死者」に、学び手や教え手を「自己を起点とする」主体のありようとは異なるありようとして、他なるものに応答する関係へと向かわせるはたらきを見て取ることができる。

また、第I部と第II部の間に置かれた補論では、レヴィナスの思想における「ことば」が、〈倫理〉的な次元へと移行する主体性とどのような関わりをもちうるのかという点について論点の整理を行う。それにより、レヴィナスが用いる「ことば」に関する概念は、主体の認識や思考に収まりきらない外部にあるもの、すなわち他なるものとの関わりに関連することが明らかとなる。他なるものとの接触ないし、他なるものからの主体へのはたらきかけの発露に媒介するものに、「ことば」が位置づいている。「ことば」が単に自己同一性を支えるような方向性ではなく、他なるものへと向かっていくという方向性を有していることが、「語られたこと」や「書かれたもの」をめぐる議論を通じて明らかとなる。

終章では、レヴィナスの思想における〈倫理〉的な主体性の諸相について、以上の議論を踏まえながら、その特徴を整理する。そして、他者の死と喪失や、自らの生への困難に苛まれる者といかに関わられるかという問いに答えるための視座を示しつつ、「死」や「教え」をめぐる議論に、どのような教育人間学的な意義を見いだすことができるのかを検討する。

本研究から導かれる結論

終章における検討を通じて、以下のような三つの論点が結論として導かれる。

第一に、「他者の死」を起点とした「死者と生者の別様の関係性」を、レヴィナスの「死」や「教え」をめぐる議論を通じて探求できる点が挙げられる。「死」との関係に着目することで、主体は「自己の死」を克服する過程において、「他者の死」への応答が求められ、その過程において自己のありようが変容するという過程が示されることになる。ここに、自己

のありようにおいて「他なるもの」への向かい方に重きがある人間形成のベクトルを有するという、レヴィナスの〈倫理〉的主体性の特徴がある。つまり、「死」について考えることは、「他者の死」を題材として学ぶことではなく、「他者の死」に対して応答し続けること、語り直し続けるという主体が立ち現れることを要請するのである。言い換えればそれは、死者を生者の自己規定のために領有するのではなく、「表象し得ないもの」に対して「我ここに」という合図を送り続ける、自己回帰しない主体のありようとして関わるような、死者と生者の別様の関係性を探求する営みへと向かわせることを意味するのである。

「表象し得ないもの」、生者の自己規定を拒むような死者との関わりは、生者自身にとって、自己が壊れるような衝撃的な経験となりうる。それは、理不尽な喪失によって、自己を支える意味を失うようなトラウマティックな事態と直面する際に見られるような経験であるとも言える。そうした経験に対して、失った意味を再び産出させる〈思考〉をもたらず営みを、本研究では「教え」と呼ばれる関わりのうちに見て取った。「教え」の関係において、教え手と学び手の間には、「聞くこと」そして「問いを立てること」という応答的な行為が見られ、それは、二者間での無限責任としての行為だけでなく、二者以上の関係においても「正義をもって私は何をしなければならないのか」という「問い」を喚起させるはたらきとして機能しうるものである。レヴィナスの「死」に関する観点に基づいたとき、「死」について教育で取り扱うことは、そうした「問い」を語り直し、他なるものに応答する〈倫理〉的主体性へと変容させる、死者と生者の別様の関係性を探求する営みとして捉えることができる。そこに、「死」と「教え」の教育人間学的な意義を見て取ることができる。

第二に、「死」や「教え」に関する議論から〈倫理〉的な主体性の諸相を、単なる他者への無限責任とは異なる文脈として、教育や人間形成の俎上にのせることができる点が挙げられる。「死」に関して、「自己の死」の限界に対する克服として論じられた中期の「多産性／繁殖性」や、中期から後期にかけて探究された〈作品〉に関する議論のうちに、「同一的な項の存続とはべつのしかたで連続性を確認する」あるいは「自己回帰しない」主体のありようを確認することができる。こうした主体のありようは、無とは異なる自己無化のはたらきとして捉えることができる。また、「教え」の関係に見られる「聞くこと」の他動性には、「主語となる主体に利害や関心が含みこまれないような」はたらきを確認することができる。いずれの議論も、レヴィナス自身が後期に論じた「存在するとは別の仕方で」と同義であると述べているわけではない。しかし、〈倫理〉的主体性の様相としてそれらを捉えようとしたとき、後期の議論に至る過程において、「存在するとは別の仕方で」に通ずる主体性の萌芽を、それ以前の議論において見て取ることができる。それは、レヴィナスの中期思想から後期思想に至る過程を「転回」と捉える従来の解釈に対し、近年提起されている「深化」と捉える解釈に位置づくものとして、レヴィナスの思想を解釈することを可能にする。

第三に、他なるものへの応答において、多様な「ことば」の介在が〈倫理〉的な関わりを可能にする点が挙げられる。〈倫理〉的な応答として主体がなすのは、「語り」を介した関わ

りであったが、きっかけとなる他なるものとの関係においては、「語り」以外にも、言語の裏返しとしての「沈黙」や「本物のテキスト」、「根底的に考えられた〈作品〉」といったものが介在している。そこには、「根底的に考えられた」といった意味を含む「ことば」とは対照的な、いかなる意味も含まない「挨拶」や、「書かれたもの」といった「ことば」もある。しかし、レヴィナスはそこに、言語やロゴスを至上とする思想を見ようとしていたわけではない。むしろ、「ことば」の持つ危うさ、その暴力性に慎重であった。そうした「ことば」への向き合い方のうちに、レヴィナスは「哲学」という営みの意義を見て取ろうとしていたのである。

こうしたレヴィナスの視点は、「教え」や「学び」のプロセスにおいても、欠かすことができない。「ことば」を「聞くこと」、その営みを通じて他なるものの前に身を置くことは、認識や存在に先立つ〈主体性〉の出来が「ことば」によって駆動されていることを意味する。それは、構築された知によって、他なるものを同化するという身振りではなく、構築された知を破壊しうるような外傷を受け、意味を失う状態から再び〈意味〉へと反転することを促す営みとして位置づけられる。

教育という場、教え手と学び手の間で、そうした営みが常にはたらいっているわけではない。それゆえに、他なるものとしての「死」と向き合っていく際には、自己回帰とは異なる地平へと向かうための媒介として、「ことば」の介在が、より一層求められる。そして、「ことば」の介在とともに、主体は他なるものへの〈倫理〉的な応答において、「存在するとは別の仕方」を探究する「問い」へと開かれる。他なるものへの〈倫理〉的な応答をめぐる「問い」と語り直しが、喪失や自らの生に苦しむ者だけでなく、無関係と思われる者にも「教え」として開かれることによって、「他者の死」や「自らの死」をめぐる苦しみへの応答の契機となるのである。